

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2018年度第2回研究会（通算第8回目）

日時：2018年12月15日（土）14:00-18:30, 2018年12月16日（日）9:30-13:00

場所：大阪産業大学16号館

共催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」、文科省科学研究費（基盤研究B）「アフリカ食文化研究の新展開：食料主権論のために」（代表者：藤本武（富山大学），課題番号：18H03441），文科省科学研究費（基盤研究B）「アフリカ農民の生計における小規模な現金獲得活動と「在来の技術革新史」への視角」（代表者：杉山祐子（弘前大学），課題番号：18H00776）

出席者：鶴田 格、石川博樹、安溪貴子、小松かおり、佐藤靖明、杉山祐子、田中利和、松田正彦、藤本武、藤岡悠一郎、深澤秀夫、池上甲一、村尾るみこ、伊藤紀子

発表1：伊藤紀子（農林水産省農林水産政策研究所）

「東南アジアにおける商業的農業開発と農村の慣行・社会関係の変容：ケニアの国家灌漑事業区との比較」

スコットの「モラル・エコノミー論」、ハイデンの「情の経済論」などの枠組みや、東南アジアとアフリカにおける商業的農業地域調査を参照しながら、農村の社会規範・社会関係の特色の相違について検討した。東南アジア農村では二者関係を通じた均衡的互酬性規範に由来する交換が行われてきたが、1970年代以降の「緑の革命」の過程で、コメの商品化、農業労働や土地貸借に関する慣行の変化を通じて衰退し、経済格差の拡大・社会関係の形式化が進んだ。その結果、世帯間の交換は儀礼の場で行われ、多くの人は生計を市場取引に依存するようになった。他方アフリカでは、発表者が調査を行っているケニアの国家灌漑事業区を含め、一般的互酬性規範に由来する一方的食料分配がなされ、広い水田を利用できない若者の生存を支えている。若者世代は灌漑事業区の周囲に水田を広げ、相互扶助も行っている。このように、ケニアでは農民の生存維持と社会的規範が現在も強く結びついている。生存維持規範の共有、食料分配慣行の実践を通じ、民族の伝統や社会関係を再生産し続けるアフリカ社会の内発的過程を重視し、稲作開発の過程でも伝統的価値観や社会福祉の向上に資する政策が求められる。

発表2：池上甲一（AA 研共同研究員，近畿大学）

「個別農業技術論から農法論へ その1—農業技術の変遷と農法論の必要性に向けて—」

在来農業革命を考える際の視点として、在来農業からのアプローチだけでなく、現代の農業イノベーション論から逆照射することも有効であるとの立場から、ICT/IoT/AI 農業論を批判的に検討した。農業革命は技術的イノベーションの側面を含むからである。しかし、ICT 農業はいまのところ、誰でもどこでも使える技術になりえていない、導入分野と実用化されている技術が限定されている、導入コストが高い、といった理由から部分技術にとどまっているし、経営および地域内での有機的結合が欠けている。後者の点は、生産を管理された極小空間に閉じ込める特質に起因しているもので、単に技術段階の遅れによるものではない。この1点だけでも、さまざまな関係性を把握する農法論的視点とは大きな距離がある。ICT 技術は普遍的であるが、農業における技術開発の方向性はその風土性、歴史に規定されることを留意する必要がある。この点で、社会関係に投資をするインドやアフリカでは、生化学的技術や機械技術よりも、社会資本技術に依拠する技術開発が持続的で、地域コミュニティと接合的である。

発表3：安溪貴子（AA 研共同研究員，山口大学）

「料理が語るアフリカの歴史」

アフリカ料理の驚くべき多様性を、1 万年に及ぶ人々の努力の賜として見直してみたい。今から約 4500 年前、緑のサハラが乾燥化して、採集・狩猟・遊牧から定住・栽培が始まったことを西アフリカの考古学遺跡は教えている。作物はトウジンビエ、フォニオ、グラベリマイネなどの穀類であった（第1次アフリカ農業革命）。約 2800 年前に、鉄器と東南アジアからのバナナやヤムイモを携えた人たちが森に入っていく。バンツーの拡散である（第2次）。約 500 年前に始まる大航海時代に、アメリカからキャッサバやトウモロコシがもたらされた（第3次）。

これらの変化で食材が大きく変わったが、その料理法はどうだろうか。野生を含む穀類や芋を焼く方法は古いが、土器が登場すると粒粥、あら挽き粥などが始まる。また石臼で粉にして熱湯で捏ねる粉粥を作るようになる。この方法はサハラ南縁のサバンナを東にたどった。バナナやヤムは茹でて食べるがさらに臼と杵で搗きつぶす方法も登場して森の中に広まった。このように捏ねたり搗きつぶしたりする澱粉食が広まる中で、新たな食材としてのキャッサバは、多彩なアフリカ独自の毒抜き法を開花させた。主食としてのトウモロコシの普及は都市化が始まる 20 世紀になる。いずれも固粥であり、サハラ以南のアフリカでは、エチオピアを除いて植民地支配の時代までパンの技術がなかった。

発表4：村尾るみこ（AA 研共同研究員，立教大学）

「強制移住がもたらす技術の変化と＜革命＞—アンゴラとザンビアの国境地帯の事例」

アフリカ南部のアンゴラでは、15世紀以降のポルトガルによる植民地支配と40年と長きにわたる紛争が続いた。それらの影響をうけ、アンゴラとザンビアの国境地帯において移動をくりかえしてきたンブダの人びとは、キャッサバを中心とした生計を営んできた。本発表では、ンブダのキャッサバ栽培技術に注目することによって、彼らの移動先での生計活動の歴史的な変化を考察した。これにより、流動的な状況下でのキャッサバ＜革命＞の可能性について検討することを試みた。

ンブダは、紛争前のアンゴラでは雑穀とキャッサバを中心に生計をたてていた。しかしザンビアへ逃れた後は、1mほどのキャッサバの茎を植え付け、複数の畑で一品種の生育段階をずらす栽培法をおこなってきた。その後、アンゴラへ再び戻ったンブダの一部は、もともとの30cmの茎を斜めに挿すもともとの技術およびザンビアでの技術が混在する、一筆の畑の区画ごとに異品種を植え分ける、単作植え分け栽培法をおこなってきた。そうした技術と栽培法の変化には、移動の先々での品湯への嗜好性、移動前後の流動的な社会関係によるものが関係していた。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.